

はじめに

◎ クリティカル・リーディングとは

最初にあるエピソードから紹介しましょう。クリティカル・リーディングを考える好材料になると思います。登場してもらうのは、マルティン・ルター¹です。高校の世界史に登場してきた人物で、ヨーロッパで宗教改革を起こした人物としてみなさんの記憶に残っているのではないのでしょうか。

彼が生きた時代、そしてそれ以前の中世・ルネサンスまでのヨーロッパ人は神の存在を信じていました。そのことをみなさんのほとんどは実感できないかもしれませんが、知識としては理解はできると思います。さらにいえば神のことはすべて「聖書」に書かれてあるとされていました。この「聖書」と人々をつなぐところに教会が存在していました。

これが中世・ルネサンスの常識であったのです。だから誰も教会の存在を疑いませんでした。教会はそうした意味では、キリスト教の信仰には欠くことのできないものでした。たとえばパリの国立図書館に所蔵されている『教訓型聖書』という13世紀の美しい本があります。これは上下に配置された二つの丸い輪で一組になっていて、一頁に4組の絵が描かれたあるユニークな構成をしています(図-1)。輪の内、上の輪には『旧約聖書』の、下の輪には『新約聖書』のエピソードの図像が描かれています。その脇にそれぞれのエピソードの説明があります。そのうちの一つを見てみましょう。『旧約聖書』のアブラハムが神のお告げで晩年、やっと生まれた子供、イサクを生け贄として捧げることになり、イサクに薪や生け贄用の道具を背負わせ、親子で山を登っていく場面が上の輪のなかに描かれているものがあります。一方、下の絵には十字架を背負ってゴルゴダの丘を登っていくキリストの姿が描かれています。この本の特徴は、このようにすべて上の輪に『旧約聖書』、下の輪に『新約聖書』

1 マルティン・ルター(1483-1546) ドイツの聖職者。贖宥状の効力を論じた95箇条提題により、宗教改革を展開。また『新約聖書』のドイツ語訳を試みた。

書』のエピソードが描かれていて、実は『新約聖書』で語られることは、あらかじめすでに『旧約聖書』で予告されていたという姿勢に貫かれていることです。

こうしたことを踏まえて、次に掲げる絵（図-2）を見てみましょう。上の輪はアダムのあばら骨からエヴァが生まれたというエピソードを図像化したもので、アダムの脇腹から赤ん坊のようなエヴァが神の手によって引き出されているものになっています。一方、下の輪には処刑されたキリストの脇腹の傷から、神がエクレスシアという女性を引き出しているものになっています。このエクレスシアとは教会の意です。女性に擬人化された教会がキリストから誕生してくることになっています。

なぜこの『教訓型聖書』のキリストの脇腹からエクレスシアが生まれる絵を取り上げたかといえば、教会の正統性を誰も疑わなかったことの一例として知ってもらいたかったからです。教会は神の子であるキリストから直接、生まれたのであり、またエヴァが誕生したとき、神が「生めよ、増えよ」と人類の繁栄をことほいだように、教会も世界にあまねく存在するものとなることを示しています。



図-1



図-2

ですが、教会はやがて信仰や祈りの場であると同時に、政治や権力闘争の場となり、教皇や司教などの聖職者は神の代理人として人々にキリストの愛を授ける代わりに、さまざまな特権と税を取り立てる権利を有するようになりました。それが大きな弊害と教会の腐敗をもたらしたことは世界史が私たちに教えてくれます。こうした腐敗に対して改革の声を挙げたのが、ルターであり、カルヴァンだったこともみなさん、ご存知でしょう。

でもルターは一体、何をしたか改めて考えてみたことがありますか。世界史ではルターが宗教改革を行ったことは習ったかと思いますが、実際には彼は何をしたのでしょうか。ルターは両親の反対を押し切って修道士になります。そして彼は徹底的に「聖書」を読んだのです。ルターは後に読むこととは「祈りであり、瞑想であり、試練である」と語っているように、読書は彼にとって信仰そのものだったのです。それくらい彼は徹底的に「聖書」を読みます。彼のエピソードの一つに借金をしてまで、「聖書」を大きな余白を取った紙に写本してもらって何度も読み直し、余白に註釈を書き込んでいったというものがあります。その結果、彼はあつ一つのことに気付きます。それは「聖書」のどこを読んでも、教皇を頂点として、枢機卿や大司教や司教がいる教会制度を設けろとは書いていないということです。つまりその当時の人が当たり前で、神によって設けることが定められていたと思っていた教会制度自体は何の根拠もないものだったということです。誤解しないでいただきたいのはこれをもって私が今のカトリック教会を否定しているのではありません。ルターがこのとき気付いたことは何だったのかを明らかにしたいだけです。この当時、「聖書」は世界を秩序づけ、構成を保証してくれる根拠であり、原点でした。ルターは「聖書」を読み返し、そこに教会の存在理由が何一つ書かれていない、当たり前と思っていたことの根拠がないことに愕然としたはずです。

その結果、彼は宗教改革という一種の革命を起こしたのです。世界観を一変させるようなパラダイムの変換を行ってしまったのです。重要なのは彼が贖宥状に関する 95 箇条の提題を掲げたことで、パラダイムの変

換を起こしたのではなく、「聖書」を読み込むことでそれを起こしたということなのです。彼が「聖書」を読み込んで気づいたことに比べれば、彼の所謂宗教改革の運動は、その結果にすぎず、付随的な出来事といっても過言ではありません。こうした当たり前と思っていたことが根柢のないものであり、実は約束事にすぎなかったことを露呈させ、まったく新しい見方をもたしらしてくれるのが、クリティカル・リーディングです。

私はこのルターのことを佐々木中²の『切り取れ、あの祈る手を』というエッセイで知りました。この本の第二章がルターを扱ったものですが、彼はクリティカル・リーディングによってテキストを、そして世界を読み換えることが、革命を引き起こすのだと述べています。クリティカル・リーディングとは何かを考える刺激的な本です。

ここでクリティカル・リーディングとはどのようなものか、少し整理しておきましょう。クリティカルという語は日本語では「批判的」と訳されます。批判的というと何か作品に難癖をつけ、重箱の隅をつつくように非難するような印象を持ててしましますが、英語ではcritic、フランス語ではcritiqueですが、この語には、既存の価値にとらわれないという意味合いが含まれます。つまり自分の思い込みを含めて、主観的ではない読解のことを批判的な読解といいます。criticあるいはcritiqueとはもともとギリシア語の「判断する、決定する」を意味する語から生じています。判断とは理性によって正しい認識や選択をすることです。やがてそれはある事柄を思い込みや偏見にとらわれずに判断することになっていきます。このように語源から意味を考えれば、批判的というのは、当たり前だと思い込んでいたものの当たりの部分を一旦、括弧でくくって物事を捉え直すことになります。

あなた自身を含め、多くの同時代人が無意識に前提としているもの、つまり当たり前と思われるものが当たり前でなく、私たちの思い込みであったことに気づくとはどういうことでしょうか。当たりのことというのは、私たちが普段、生活していて混乱をきたさないようにしている

2 佐々木中（1973- ） 日本の思想家、京都精華大学教員。『定本 夜戦と永遠』等。

秩序のこととでも言い直しましょう。批判、批評というものは今まで当たり前だと思われていたものがそうではなかったことに気付いた時の、地面が突如グニャグニャになり、立ってられないような不安で、危機的な状況を突きつけることでもあります。こうした問い直しがあるからこそ、パラダイムの変換、革命を起こすことができるのです。以上のことはやや大げさかもしれませんが、クリティカル・リーディングとは、私たちが普段、何気なく当たり前だと思っていることを「それは本当に当たり前のことなのだろうか」と問うことを教えてくれるものなのです。私たちはとすると、というよりも常にある一定の価値観のもとに秩序を構築し、この価値観に組み込まれないものはマージナルな領域に排除してしまい、一顧だにしくくなります。それが多様なものを秘めた世界にとってどれほど危険であるかは理解できると思います。確かに「当たり前」という価値を形成することは秩序を構築する上で、どうしても必要なことですが、こうした単一的な価値観が人類に悲劇をもたらした例をみなさんは世界史からいくつも学んでいると思います。読書をしてそれを読み直すという行為は、とすると一定方向に流れてしまう価値観に「さてよ、別の見方もあるのではないか」

と考えさせてくれる契機になり、それがひいては世界を組み換えることにつながっていくのではないかと思います。

ところでクリティカル・リーディングは、個人的な読書の営みとは一線を画すものであることには注意しましょう。個人的な営みとしての読書は大切です、そうあってしかるべきものです。「読書は、若者がやがて経験することどもの原型であったり、あるいは、それを入れる容器、比較の対象、分類の枠、価値を測定するもの、美のパラダイムなどであり得るという意味で」「教養としての効能もある」。「たとえ若いときに読んだ本そのものについては、ほとんど、またはぜんぜん覚えていないにしても、ずっとあのいだ私たちの役に立っているのだ。おとなになってからその本を読みなおしたとき、いつのまにか自分の内部のメカニズムみたいになってしまっていて、源泉がどこにあったのかさえ忘れていたというような、いくつかの特徴に気づくことがある」。これはイタリアの

作家イタロ・カルヴィーノ³の『なぜ古典を読むのか』（須賀敦子訳）からの言葉です。文学作品や古典の読書は、読者の人生でいずれ芽が出る知性の種を蒔いておくというわけです。私自身、カルヴィーノの言葉のような経験を一度ならずしています。そうした意味ではカルヴィーノの言葉は非常に有効です。しかしやはりこれは個人の営みです。一方、クリティカル・リーディングとは世界を読み換えると同時に、「私」以外の人と議論をできる共通の場を生み出すことでもあります。そうした意味ではクリティカル・リーディングはポパー⁴の「反証可能性」を有している必要があります。

大学生であれば、このクリティカル・リーディングは差し当たってレポートや試験の答案、あるいは卒論などを制作するときに行うことになるでしょう。そういう意味ではクリティカル・リーディングは「論文作成」と密接な関係があります。読むという行為が書くという行為の準備、いや第一歩となるのです。たかがレポートだからといってあなどっては いけません。レポートであってもパラダイムの変換は可能なのです。

ではこのクリティカル・リーディングはどのように行えばよいのでしょうか。そのヒントになるのが本書です。クリティカル・リーディングに絶対無二の公式は存在しません。たくさん本を読み、考えるという経験を積んで体験的に習得していく必要があります。しかしそのためには、あらかじめコツみたいなもの、どこに目をつければいいのかを知っていれば、習得も早くなります。

ポイント

クリティカル・リーディングとは、単なる批判でも、重箱の隅をつつくことでもなく、テキストをわれわれが当たり前と思っている常識とは別のものに読み換えることである。

3 イタロ・カルヴィーノ（1923–1985） イタリアの小説家。代表作に『木のほり男爵』、『不在の騎士』等。

4 カール・ポパー（1902–1994） イギリスの哲学者。仮説が実験や観察によって反証できる可能性がなければならないという反証可能性を説いた。『科学的発見の論理』等。

◎ 目的と構成

大学に入学してしばらくすると、語学以外の科目で課題図書を指定され、その本のレポートを書くことが求められたりします。そのときに個人の経験に基礎をおいて、作者や主人公に共感したり、反発したりするだけでは残念ながら大学の要求にかなっていないとはいえません。これは感想文や小論文のレベルといわれてしまいます。言い方をかえれば、感想文や小論文はクリティカル・リーディングとはいえないということになります。

クリティカル・リーディングについては、本書のシリーズである佐藤望他編の『アカデミック・スキルズ 第2版』に概略が書いてあります。この本にしたがって、まとめてみましょう。

クリティカル・リーディングは次のことに注意する必要があります。

テキストの全体像を把握すること。

テキストを正確に理解すること。

難解さの壁を乗り越えること。

まずは対象となるテキストを読む際に注意すべき点として、テキストの全体像を把握することから考えてみましょう。テキストを最もよく要約しているものは、実は題名です。題名はこれから読むものの内容が短い言葉で端的に表現されています。題名から本の内容のおおよその内容を想像することは可能です。また学術書や思想書であれば、目次を見てみましょう。各章の章題や大見出し、小見出しの情報が掲載されています。これを順を追って確認していくだけで、本の内容の要約が作れてしまう場合さえあり、テキストの全体像を把握することが可能になってきます。

また学術書や思想書には、「序文」や「はじめに」が最初にあります。これは本全体の要約になっていることが多いので、これに目を通しておくと、テキストの全体を俯瞰でき、理解の助けになると思います。

テキストの全体像を把握したら、次に正確に内容を把握しましょう。

正確に読んでいるかどうかは要約を作ってみるとよく分かるといわれています。要約はそのテキストに書かれていることの本質的な部分をあぶり出すものだからです。しかし一つ一つのテキストの要約を作っていくのは大変です。そこで考えられるのが、キーワード、あるいはキーセンテンスを発見することです。核となる語や文章は必ず存在します。それを見つけられれば、それに対する反論が書かれているのか、例証なのか、発展なのかということが分かってきます。キーワードやキーセンテンスから正確な内容理解へと発展させるように考えてみてください。

その上で、テキストを批判的に読解するということを考えていきましょう。これが先ほど述べたテキストを正確に理解した上で、それを批判的に考えていく読解のことです。批判的とは単なる反論ではありません。客観的な姿勢に立って、テキストを検討することだと考えてみてください。何だか難しそうだな、と思った人がいるかもしれませんが。でも大丈夫です。そんなに難しいことはありません。重要なのは、一度テキストを突き放して検討してみるという姿勢です。

ところで『アカデミック・スキルズ』で述べられていることは、どちらかというと評論や学術書の類を前提にしています。人文科学、とりわけ文学作品とはいえば、事情は異なってきます。章題がなかったり、「序文」が付されていないかったりと、『アカデミック・スキルズ』が対象としているテキストとは体裁も何も違っていることの方が多いのです。そのため『アカデミック・スキルズ』で書かれていたことをそのまま実践しようとしてもできず、「困ったな」という事態に陥りかねません。ちょっとした工夫が必要になってきます。

そのためにこの本では、人文系のテキストを前提にしたクリティカル・リーディングを三段階に再編して考えてみたいと思います。この三段階で先ほど挙げた三つの要件を満たすことができます。

第一段階 「あれっ？」と思ったことから「問い」を作る。

第二段階 「問い」を検証する。

第三段階 「問い」を発展させる（論を作る）。

第一段階と第二段階を経ることで、「難解さの壁」を乗り越え、テキストを正確に理解することになります。その上で、自分の論を展開することになります。この各段階を順番に見ていきましょう。さあ、それでは始めましょう。まずは第一段階と第二段階です。

コラム：クリティカル・リーディングの準備

とりあえず私たちは、ルターのように何度も何度もテキストを読み直してみしましょう。こういってしまうとあまり科学的な言い方ではないのですが、読んでいるうちにどうしても気になってくる点が出てきます。これはおそらく各人それぞれ異なってくるはずです。こうした何となく引っかかる箇所というのは、その人のその時点での問題意識と結びついているからです。この問題意識は、まだ自分のなかでははっきりとした像を結んでおらず漠然としているかもしれませんが、みなさんそれぞれの問題意識が何だか気になるという「引っかかる」感覚を生み出します。

具体的にどうすればいいでしょうか。みなさん、鉛筆を用意してください。鉛筆を片手に気になったところに線を引きましょう。きわめて原始的で、このデジタル社会では時代錯誤的アナクロニズムにさえ見えますが、これが最も有効なやり方です。線を引くといっても一ページの三分の二以上も線を引いては線を引いた意味がありません。キーワード、あるいは数行程度です。もちろん何か気になったら余白に書き込みをする必要もあるでしょう。

また蛍光ペンで引くというやり方もあります。個人的な好みですが、私はあまり蛍光ペンでは引きません。蛍光ペンでマークした箇所は消せないからです。どうしても蛍光ペンを使う必要がある場合は、私は黄色の蛍光ペンを使います。黄色の蛍光ペンでマークした部分は、コピーを取ると、色がコピーに出ないからです。もう一度、白紙の状態を読むことがこれで可能になります。

付箋を貼るということもあります。しかしみなさんも付箋を多用して、本が帯かはたきようになってしまったことはありませんか。付箋は貼っ

であるが、どこが何で気になったか分からなくなってしまいかねません。
ですから私は鉛筆の線引きと付箋を併用するようにしています。

線を引いたり、書き込んだりせずに付箋だけを貼る場合もあります。
これは図書館などで借りた本であるとか、貴重な（大抵の場合私だけに
とってですが）本の場合です。このときは付箋だけを貼って、できるだけ
早い段階、つまりまだ鮮明に記憶に残っている段階で、付箋を貼った
箇所をパソコンに打ち込んでおいたりします。

最後に私自身も電車やバスの中で本を読んでいて、付箋も鉛筆も出せ
ない時によくやってしまうことなのですが、気になった箇所のページの
端を小さく折っておくやり方もあります。しかしこれは付箋以上に何が
気になったのか、後で分からなくなってしまうことが多々あります。あ
まりお奨めしませんが、やむを得ない状況での対応策ではあります。

同じようなことですが、最近は携帯電話やスマートフォンにカメラが
搭載されているのが普通ですから、気になったところをカメラで撮影し
て、パソコンに送って、後で整理するというやり方もあります。慣れの
問題もありますが、私個人は意外と面倒だという印象です。というのも、
ページの端を折っておくと同様、気になったページを撮影しても、時
間が経つと何が気になって撮影したのか忘れてしまうことが多いからで
す。もしこの方法を使うとすれば、気になった箇所に線を引き、その上
で写真データをPDFに変換できるアプリがありますので、そのアプリで
撮影し、PDF化してパソコンに保存するという手間をかければ、後々、
データをいろいろ使い回せるので有効だと思います。

.....

Contents

はじめに.....	3
第1章 どうやって本を読む!?	
あるいはどうやったら本を読める!?	15
1. 「どうやって本を読む?」	16
2. 感想文では駄目なのか	18
3. 小論文に欠けているもの	22
第2章 疑ってみよう、問いを立ててみよう	27
1. 大岡昇平と「堺事件」	28
2. 大岡昇平が「あれっ?」と思ったこと	30
3. 「堺事件」の「切盛」と「捏造」	34
4. 「堺事件」から学ぶべきこと	39
第3章 〈語の意味〉を疑ってみよう	43
1. 作者独特の言葉をあぶり出す	46
2. 何気ない語に目を向けよう	56
3. 日常語に気をつけよう	67
第4章 〈論理の構造〉を疑ってみよう	81
1. 接続詞や接続助詞から関係を見つけ出す	82
2. 演繹と帰納	89
3. 論証	94
4. 論理の流れを疑う	103
5. 論理の前提を疑う	106

第5章 理論の罫にはまるな	117
1. 幻想小説のためらい	120
2. 悲劇は合理的選択	127
3. 理論を作る	132
第6章 問いを発展させる	135
1. 構造を浮き彫りにする ——フローベール『感情教育』の場合	136
2. 貨幣と想像力——村上春樹「パン屋襲撃」を読む	146
3. 拡張する「私」——中原中也「時こそ今は……」	158
4. 接ぎ木と断絶——もう一つの「時こそ今は……」	165
第7章 クリティカル・リーディングから論文へ	175
おわりに.....	192
参考文献.....	194

|| 第 1 章 ||

どうやって本を読む!?
あるいはどうしたら本を読める!?

1 「どうやって本を読む？」

クリティカル・リーディングについて話す前に「どうやって本を読むのか」ということについてちょっと考えてみましょう。みなさんは「本の読み方なんか知っている」と思うかもしれません。なるほど確かに本を読むということなら、小学校に入ったときから、いやいや今時であれば、就学前から訓練されてきたことは確かです。そういう意味では本の読み方は知っているはずですが、でもたとえば「夏目漱石の『こゝろ』について自由に論ぜよ」という課題が大学の授業で出たとき、みなさんはどう思うのでしょうか。「何を論じていいのかわからない」という戸惑いではないのでしょうか。これは「どうやって読んだらいいのかわからない」と言い換えることができます。どのようにレポートを書いていいのかわからないという事態に直面して初めて、自分は読み方を知らないのではないかと感じるのです。ではこの課題を前にしたときの戸惑いの原因は何だと思えますか。これがクリティカル・リーディングの本質的な部分と関わってきます。

このことを考えるためにまずは以下のテキストを読んでみましょう。

テキスト

時こそ今は……

時こそ今は花は香炉に打薫じ

ボードレール

時こそ今は花は香炉に打薫じ、

そこはかたないけはひです。

しほだる花や水の音や、

家路をいそぐ人々や。

いかに泰子、いまこそは
しづかに一緒に、をりませう。
遠くの空を、飛ぶ鳥も
いたいけな情け、みちてます。

いかに泰子、いまこそは
暮るる籬^{まがき}や群青^{ぐんじやう}の
空もしづかに流るころ。

いかに泰子、いまこそは
おまへの髪毛^{かみげ}なよぶころ
花は香炉に打薫じ、

中原中也『山羊の歌』

これは中原中也⁵の「時こそ今は……」という詩です。文学好きなみなさんなら、もしかすると一度はどこかで読んだことがあるかもしれません。「これを読んでみましょう」といわれ、「この詩について論じてください」と問われたら、みなさんはどうしますか。おそらくこの詩を作った主体、すなわち作者の心的状況や心情に思いをいたし、それをこれまでの自分の生き方と重ね合わせることでその登場人物に対して、共感を覚えたり、反発したりし、そのなかから想像力や豊かな感性などを育んでいくような読み方を訓練されてきたはずです。そう、それはそれで問題ないことですし、あってしかるべき読み方です。

5 中原中也（1907-1937）日本の詩人、翻訳家。代表作に『山羊の歌』、『在りし日の歌』、『ランボオ詩集』。

2

感想文では駄目なのか

この詩では明示されていませんが、確かにこの詩を語る主体、つまり作者がいるわけですから、この作者の心情に共感するように読み解いていくのは自然でしょう。この場合、中原中也という詩人の伝記的な事実を知らなくても、ここで呼びかけられている女性「泰子」が、主体、つまり詩を語っている人物にとって大切な人であり、愛の対象となっていることは分かります。そしてみなさんの個人的な体験と重ね合わせ、こうした一日の終わりに「家路を急ぐ人々」のように慌ただしく帰宅を急ぐ光景が繰り広げられている一方、語る主体と「泰子」の二人には静謐で、ゆっくりとした時が流れていることが、いかに幸福なことかということを実感、あるいは反復することができるはずです。そこから語る主体と「泰子」の関係に想像を膨らますことも可能でしょうし、幸福ということに思いを馳せることもできるでしょう。ですからこのテキストを読んで、次のように語ることは自然なことであると思われます。

ケース1

私は中原中也さんの「時こそ今は……」の世界が、二人だけの特別な時間を歌い上げているという点で、素晴らしいと思います。「家路を急ぐ人々」に象徴されるように、慌ただしく日々を過ごしている都市生活の時間があります。しかしその一方で、恋人と過ごす、こうした喧噪に満ちた世間から隔絶し、二人だけの特別な時間を形成することができるのです。「遠くの空を、飛ぶ鳥」や「暮るまがきる籬ぐんじやうや群青の／空」といった自然物が都市の人工的な要素と対立的に謳われて、恋人と過ごす時間が、いわば自然という根源的なものと一体となるような広がりがこの詩にはあると思います。実際、私も大切な人と一緒にいると、時を立つのも忘れ、時間という人間の作った人工物から解放されて、自然に戻る気がします。

どうでしょう。仮にこの感想を抱いた学生をAさんとしませんが、確かにこうしたAさんの読み方は正しいもので、否定するべきものではありません。先ほどのカルヴィーノの言葉を再び借りてきていえば、この感想を抱いたAさんは詩から「若者がやがて経験することどもの原型」を汲み取っているといってよいのではないのでしょうか。文学作品に個人の体験や感情を重ね合わせて読むことは、文学読解として自然なことであり、文学の在り方として決して間違っていない。こうした共感が文学作品を読む快樂の一つであり、このように時代と地域を超えて自己投影できる余地のある文学作品が名作として残るのかもしれない。

しかしテキストを読むということにもTPOがあります。この中原中也の詩が大学の「文学」の授業で取り上げられ、これについて課題が出された場合、Aさんの読み方は「感想文」と言われてしまいます。なぜ、これが「感想文」と呼ばれてしまうのでしょうか。「感想文」は小学校の頃から書かされてきたので、この本を読んでいるみなさんにとってなじみ深いものだと思います。

「大学生に向かって感想文というのは、いくら何でもひどすぎる、小学生と同レベルに扱うなんて！」

というのであれば、鑑賞型の読解と呼んでもかまいません。この感想文であれ、鑑賞型の読解であれ、どちらの呼称でもかまいません。何がそうしたものにさせてしまうのでしょうか。みなさん少し考えてみてください。大学一、二年生の学生を対象とした「人文科学特論」という授業でこのAさんのレポートを提示して、

「これでは大学での読解として評価されませんが、どこに問題があるのでしょうか」

と尋ねたことがあります。すると次のような意見が出されました。

- ・「私」が使われている。
- ・「～思う」という表現が使われている。
- ・「素晴らしい」などの主観的な形容詞が使われている。
- ・「都市」という言葉が使われているが、詩自体には都市を明示している

要素はない。

- ・「です」「ます」調である。
- ・「中原中也さん」などの不必要な敬称が使われている。

他にもたくさん意見が出ましたが、これらを見ていると、要するに、主観と思い込みということに問題点を集約させることができるでしょう。ちょっと詳しく見てみましょう。「私」が登場するのが、このタイプの読み方の特徴です。Aさんの文章でも「私」の気持ちや体験がテキストに重ね合わせられて語られています。最初の一文は「私は～と思う」となっています。「思う」という主体は誰かという、それは語っている人、書いている人です。日本語の場合、「思う」ということは、個人の頭に浮かんだことであり、その頭に浮かんだものが他人と同じかどうかはあまり問われません。考えている主体である個が想起したことを問題にするのが「思う」という動詞に含まれています。ですので「私は～思う」は、「私」の気持ちを述べていて、その気持ちを他人がこの「私」と同じように評価するかどうかという基準は排除されてしまいます。感想を述べている「私」の気持ちが重要なのであって、この「私」の気持ちが自分以外の人の気持ちと共通するものである、すなわち普遍性があるかどうかということには注意を払わなくてもよいということです。

感想文では「私」というものが全面に出てくることになります。そこでは私の体験や共感したりする気持ちが重要なので、そうした体験や感情が特殊なのか普遍なのかは極端なことをいうと関係がないのです。こうした読みが「主観的」といわれるものです。

この主観的な読みが、往々にして根拠のない思い込みにとらわれてしまうことになります。Aさんは「都市」と「自然」の対立という図式を作っていますが、果たしてそれは根拠のあることでしょうか。おそらくAさんは「家路をいそぐ人々」から仕事を終えて家に帰っていくサラリーマンであふれている夕刻の東京駅や新宿駅のようなものを想像したのでしょう。だから「都市」という語を使っていると考えられます。しかし「家路をいそぐ」のは何も都会のサラリーマンだけには限りません。

農作業を終えて帰って行く人も「家路をいそぐ」ことはできます。ですから「家路をいそぐ人々」だけから都市の光景と結びつけてしまうのは根拠のない思い込みということになってしまいます。これが「私」が思ったことであれば、許されることでしょう。「私」の想像力として評価することもできるでしょう。この一節から東京駅や新宿駅を連想するのはまさに感性です。

しかしたとえばこの「家路をいそぐ人々」をAさんは都会の光景と考え、Bさんは農村の光景と考えて二人で話し合ったとしても、おそらく話がかみ合わないのではないのでしょうか。なぜでしょうか。議論をするための共通のものがそこにはないからです。感想文的なタイプの読み方ですと、こうした共通の議論をするための場が形成されません。クリティカル・リーディングでは、その結論に賛同するか反対するかは別として、作者なり話者なりの思考の軌跡をたどると、それと同じ結論にしか達しえない反証可能性というものを有していることが重要です。それがないければ議論の場は成立しません。

われわれは時として、私とあなたに共通する読みを必要とする場合があるのです。私だけの読みでもあなただけの読みでもない、われわれに共通する読みです。必要なのは共通の基盤なのです。同じ土俵に上がってこそはじめてその作品の内包する問題を議論できるのです。そうでなければあるのは私の問題、あなたの問題、彼の問題だけなのです。ばらばらの思いだけです。この共通の基盤をこれまでに使った言葉で言い表すと、「普遍」と言い換えてもよいでしょう。つまり私やあなたといった主観に左右される読みではなく、私とあなたと彼が共有する問題が「普遍的な」問題で、この普遍の部分が議論の対象になるのです。言い方を換えると、そうしたものを前提にしないで議論は成立しません。これが大学で求められる読み方です。こうした感想文型・観賞型の個人の気持ちだけの表出ではないものが、大学で要求される読み方といえます。

3 || 小論文に欠けているもの

それを踏まえた上で、個人の経験に基づく感情を超えたものがそのテキストには含まれているということを考えてみましょう。そんな普遍的なものはないし、必要もないということになれば、人文科学の諸学問を誰かと議論する余地はなくなってしまいます。「私がこう思ったからそれでよい」では、議論が成立しません。読書を個人的な営みとして考えているだけではテキストを分析し、理解したとはいえないのです。こうした個人的な営みとしてのテキスト受容は、一步間違えれば、個人的な感傷の表出として捉えられ、それは

「君だけがそう思っていることではないか」
といわれて、まわりを鼻白ませてしまいます。

また一方では、「私の読み方のみが正しい」という暗黙の主張でもって、他者の読解を排除し、独善に陥る可能性もあります。こうした事態に陥らずにできるだけ客観的な視点に立って読解することが、クリティカル・リーディングです。今度はBさんが書いたレポートを見てみましょう。

ケース2

中原中也の「時こそ今は……」は恋愛詩であることは一読してみれば、誰もが納得することである。一般論として「私」にとって愛する者は特別な存在であり、そして特別な意味を持っている。「私」は愛する者に規定されている。今の「私」を成り立たせているのは愛する者の存在に他ならない。この「私」の気持ちが世界を作っているのだ。「遠くまがきの空を、飛ぶ鳥」や「暮るるぐんじやう籬や群青の／空」といった詩行から伝わる平穏で静謐な雰囲気の世界は、語る主体である「私」の愛する者と一緒にいることの幸福感によって形成されている。この詩は作者の気持ちが投影された心象風景であるといえるだろう。